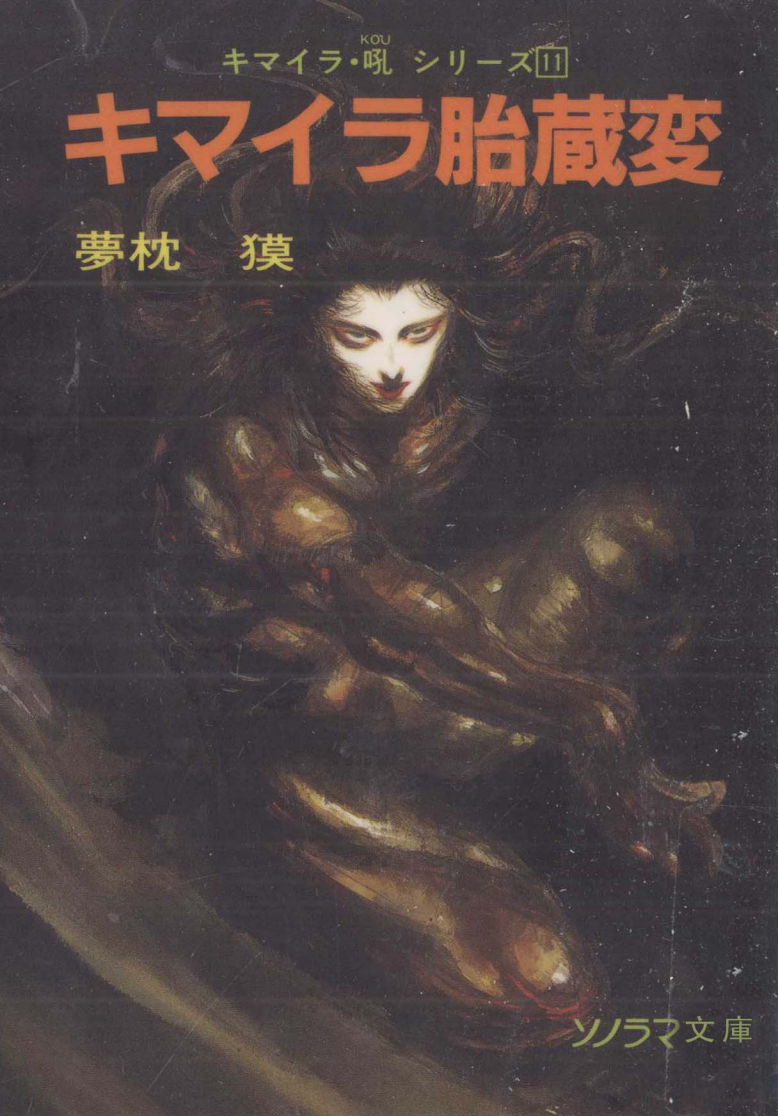
キマイラ・吼(KOU) シリーズ 11

キマイラ胎蔵変

夢枕　獏



ソノラマ文庫

ソノラマ文庫〈545〉

キマイラ・吼11
キマイラ胎蔵変(たいぞうへん)

1991年3月30日　初版発行
1991年6月15日　2版発行

著　者　夢枕　獏
© Baku Yumemakura 1991
発行人　広　橋　敏　栄
発行所　株式会社　朝日ソノラマ
東京都中央区銀座4—2—6
第2朝日ビル（〒 104）
振替番号　東京2—40311
電話番号　03—3563—6021～3
印刷所　株式会社光邦
製本所　光和製本株式会社

ISBN4-257-76545-3　Printed in Japan

ソノラマ文庫

キマイラ胎蔵変

夢枕　獏

朝日ソノラマ

イラスト／天野喜孝

目次

序章……5
第一章　月の酒……26
第二章　皇王の寺……100
第三章　虚空の風……196
転章……231
あとがき……252

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

本書は『獅子王』１９９０年12月号から１９９１年４月号まで掲載されたものに加筆修正したものです。

序章

1

天に、月がかかっている。

満月に近い、冴えざえとした月であった。

青い、透明なガラス質のその光が、夜の大気の中に満ちている。その大気の底から、東の天に、青黒い岩峰の影が突き出ている。

赤岳（あかだけ）――

八ヶ岳（やつがたけ）の主峰である。

標高、二八九九メートル。

その左右に、横岳、阿弥陀岳（あみだ）の頂（いただき）が並んでいる。その向こうに、東天狗、西天狗の頂があるはずなのだが、手前の主脈山稜に遮（さえぎ）られて、見えない。

その山稜の上の天に、月がかかっているのである。
主脈の岩稜に近い場所から始まった紅葉は、初霜とともに斜面を駆け降り、今は、八ヶ岳の山麓一帯に広がっているが、闇の中では、その麓を染めた紅葉の色までは見てとれない。
しかし、夜気の中に満ちた植物の香は、すでに初秋のそれではなく、晩秋のそれである。
しっとりとした、濃い、湿った落葉の匂い――
その匂いを嗅いでいると、闇の中でその落葉の紅い色まで見てとれそうなほどだ。
季節は熟れて、ほんのひと吹きの風で、次の季節に移ろうてゆきそうであった。
その家は、すでに色を変えた唐松の林の中にあった。
夜気の中に溶けた落葉の匂いは、むろん、様々な植物の落葉の匂いがブレンドされたものだが、その核をなしているのは唐松のそれであった。
赤岳の岩峰は、その唐松の梢の向こうの天にそびえている。
八ヶ岳の山麓にあるその家の周囲からも、すでに秋は去ろうとしていた。
八ヶ岳の岩稜は、まだ雪こそ冠ってはいないが、いつ雪を降らせてもおかしくない温度の大気が、その頂を包んでいる。
唐松に囲まれた草地があり、その草地の中に、洋風のその家は建っていた。
二階建てで、一階部分にも二階部分にもベランダがある。
その草の上に、家に背を向けるかたちで、ひとりの男が立っていた。

濃い、褐色の僧衣を着た男である。
ヒマラヤ山麓にあるラマ教の寺に住む僧が身に纏うような僧衣である。
年齢は、五〇歳前後であろうか。
頭をきちんと剃髪している。
僧は、天から斜めに降りてくる月光の中に静かに立ち、自分に青い光を浴びせてくる月を見上げているようであった。
石のように動かない。
ほとんど動かない夜気が、その僧の周囲を包んでいた。わずかに微風があるが、それは髪を揺するほどのものでさえない。宙に漂う蜘蛛の糸を、微かにゆらめかすかどうかというほどの風だ。
草は、すでに露を宿してその重さで葉先を垂れている。風がないため、露が落ちずに、葉に凝固したまま成長してゆくのである。
僧の纏う僧衣の裾も、露を含んで重くなっている。
かなりの時間、その僧はそこに立っているらしかった。
狂仏――
その名で呼ばれている僧であった。
狂仏は、黙したまま、そこに立ち続けていた。

まるで、闇の虚空から届いてくる耳に聴こえぬ音、何かの美しい旋律に耳を澄ませているようであった。

狂仏の背後で、小さくドアの開く音がした。

冷たい夜気の中に、ひっそりとあたたかな温度を持つ者が出てくる気配があった。

ドアの閉まる音――

その体温が、ゆっくりと濡れた草を踏んで近づいてくる。

女であった。

まだ二〇歳にならない若い女が、狂仏の横の草の上に立った。

亜室由魅であった。

ジーンズの上に、ざっくりと編んだ、大きめのセーターを着ていた。袖を、軽く肘近くまで引いているため、白い腕が夜気の中に出ている。パーティー用の豪華な黒いドレスが似合う成熟した大人の女の雰囲気を有していながら、このようなシンプルな服も、無造作に由魅は着こなしてしまう。

そういう天性の資質を、この由魅は持っている。

化粧はしていないが、くっきりとした眼鼻立ちは、その必要がないくらいである。

由魅は、狂仏の横に立ち、静かに月を見上げた。

由魅の、黒い瞳の表面に、青い月が映った。

「月を、ご覧になっていたのですか？」
由魅が言った。
「ああ――」
と、低い、染み込むような声で狂仏は答えた。
「月を見ていただけではない。わたしは、耳を傾けていたのだよ」
「耳を？」
「ああ」
そう答えて、狂仏は、また押し黙った。
耳を澄ませるように眼を閉じた。
「ここは、なんと生命が満ち溢れているのだろう……」
夜気に、静かに狂仏の声が響いた。
「その生命が、何と美しく調和しているのだろう……」
裡にこみあげてくる想いを、言葉として外にこぼち落とすのがもったいないとでもいうような、ゆっくりとしたしゃべり方であった。
「その生命に耳を傾けていたのですか」
「そうだ。わたしの故郷に比べると、ここはまるで生命の洪水のようだ。どこからでもこんこんと生命が溢れ出てくる……」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

狂仏は、まるで、眼に見えぬ泉がそこにあるとでもいうように、月光の中に両手を差しのべて、何かを掬いあげるような動作をした。

「わたしの周囲に、それからわたしの足の下の土の中にも、無数の生命が生きている。生きて動いている。しかも、どの生命もが、菌類から土中の微生物までもが、無駄なく繋がりあっている。こんなに緊密に……」

うっとりと、狂仏は眼を開いた。

耳には聴こえない壮大な交響曲が、豊かな旋律となって頭の中に響いてでもいるような狂仏の表情であった。

ふいに、何か思い出したように、狂仏は両手を下ろした。

「久鬼は？」

小さな声で、そう訊いた。

「眠っています」

由魅が答える。

「まだしばらくは、眼を覚まさぬであろうよ」

「父が、そばについています」

父――亜室健之のことである。

「しかし、驚嘆すべき男だな」

しみじみと狂仏が言った。
「天のチャクラ――月のチャクラも知らず、ソーマと意志の力だけで、アグニ・チャクラを統べていたのだからな。信じられぬことだ。よほど強靱な意志の持ち主なのであろう。しかし――」
と、狂仏は、傍らの由魅に視線を向けた。
「――ある段階からは、その意志の強さ故に、かえって身の裡の獣を育ててしまうのだ。鬼骨――おまえたちがキマイラと呼んでいるあれをな」
「彼は、もどれますか？」
「おそらく、もどれるであろう。月のチャクラをもってすれば……」
「月のチャクラ？」
「ぬし等一族にも教えてはおらぬ法よ。教えたとて、めったなことで、できるものではないがな」
狂仏は、また、視線を闇の向こうにもどした。
「わたしは、その月のチャクラによって、己れの生命をもてあそんでしまった男だ。触れてはならぬ果実に、それで触れてしまったのだ。その罰を、わたしはこの身に受けた――」
狂仏は言った。
狂仏の肉体は、人のそれであって、人のそれではない。

胸から腹にかけて、その素肌の表面を覆っているのは鱗である。腰から下――尻、股、膝、くるぶしにかけては、長く黒い獣毛がびっしりと生えている。
尾骶骨は、常人よりも一〇センチは長く伸びている。
「ところで、大鳳吼の行方は？」
狂仏が訊いた。
「わかりません」
「小田原の、真壁雲斎と言うたか――」
「はい」
「その男のもとへも、帰ってはおらぬのか――」
「しばらく前までは、帰ってないとわかっていましたが、今は……」
「帰っているかもしれないと？」
「はい。久鬼玄造に、わたしたちの仲間が捕らえられた折のトラブルで、いったん見張りをひきあげさせました。あるいはその間に……」
「その真壁雲斎という男、信用できそうか？」
「できると思います。おそらく――」
「雲斎というその男に、我等の方から、一度コンタクトをとってみる時期に、そろそろきているのではないかな」

「そうかもしれません」
月光の中で、由魅はうなずいた。
うなずいてから、由魅は、そこに立った時のように、顔をあげて、また月に視線を放った。
青い月が、天のその場所で、しんしんと光を放っていた。

2

森の時間の中に、九十九(つくも)は埋もれていた。
気の遠くなるような、ハルニレの森であった。
ハルニレの黄色い落葉が、絶え間なく頭上から舞い落ちてくる。森の底一面に、その落葉が敷きつめられている。それを踏んで歩く。
九十九の体重を受けて、落葉が潰れ、柔らかな腐植土の中に、浅く足が沈む。落葉を踏んだその靴の上に、新たな落葉がまた舞い降りてくるのであった。
ほとんど無尽蔵に、ハルニレの黄葉した葉が、九十九の頭上に被(かぶ)さっている。
森の高い部分には風があるのか、青い空に近い場所で、しきりに揺れる梢の葉が、午後の陽光を受けて光っている。
陽光は、森の内部にまで斜めに入り込み、幾筋もの光の帯が森に差している。

その陽光に触れると、落ちてくる落葉は、途中で黄金色に変わる。
歩いても、歩いても、森は際限がない。
不思議な迷路の内部にまぎれ込んでしまったようであった。
先をゆく埴輪道灌の姿がなければ、自分の肉体が、そのまま森と同化してしまいそうであった。
道灌の姿があるから、自分は人の意識を保っていられるのではないか。
大鳳と、そして深雪のことが、その、人の意識の中心にある。
道灌の、飄々と前をゆくその背と、中心にある深雪への想いにすがるようにして、九十九は歩いていた。
深雪のことを想うと、胸の中に、ふいに刃物が生じたように苦しくなる。
深雪への想いも、その苦しさも、すべて自分が心の裡に生じさせたものである。
山に入って数日を過ごすうちに、いつの間にか、九十九は、その傷みを拒否しないようになっていた。
この森の中に、樹がある。
草がある。
虫がいる。
土がある。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor